

ヨハネス・クリュストモス(金口イオアン)『詩篇講話』

詩篇 13 篇(第 12 聖詠)

「主よ、いつまでなのですか。とこしえにわたしをお忘れになるのですか。いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか。いつまで、わたしは魂に痛みを負い、ひねもす心に悲しみをいだかなければならないのですか。いつまで敵はわたしの上にあがめられるのですか。わが神、主よ、みそなわして、わたしに答え、わたしの目を明らかにしてください。さもないと、わたしは死の眠りに陥り、わたしの敵は「わたしは敵に勝った」と言い、わたしのあだは、わたしの動かされることによって喜ぶでしょう。しかしわたしはあなたのいつくしみに信頼し、わたしの心はあなたの救を喜びます。主は豊かにわたしをあしらわれたゆえ、わたしは主にむかって歌います。(口語訳)」

「主よ、我を全く忘ること何の時に至るか、爾の面を我に隠すこと何の時に至るか、我が己の靈の中に謀り、心の中に日夜憂を懐くこと何の時に至るか、我が敵の我に高ぶること何の時に至るか。主我が神よ、顧みて我に聞き給へ、我が目を明にして、我を死の寐に寝ねざらしめ給へ、我が敵に我は彼に勝てりと曰はざらん爲、我を攻むる者が我の撼く時に喜ばざらん爲なり。我爾の憐を待み、我が心爾の救を喜ばん、我恩を施すの主を讃め頌ひ、至上なる主の名を崇め歌はん。(日本正教会訳)」

「主よ、いつまでなのですか。とこしえにわたしをお忘れになるのですか。いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか。いつまで、わたしは魂に痛みを負い、ひねもす心に悲しみをいだかなければならないのですか。(主よ、我を全く忘ること何の時に至るか、爾の面を我に隠すこと何の時に至るか、我が己の靈の中に謀り、心の中に日夜憂を懐くこと何の時に至るか、) 神に忘れられていると感じることも、少なからず益あることである。「忘れる」とは私達が日々経験しているようなことではなく、見捨てるという意味である。多くの人は神に忘れられても、それを知ること悲しむこともないだろう。しかし、この幸いなる人(ダビデ)は、神に忘れられたことを知っているだけではなく、それがいつまで続くかを考えている。つまり「いつまでなのですか。(何の時に至るか)」とはその期間が長いことを意味している。そのため彼は嘆き悲しんでいるのである。彼の苦悩がこの世の関心事、あるいはお金、名声といったものから生じたのではなく、ただ神から愛されていないことから生じていることにぜひ注意していただきたい。

彼が神に忘れられたことを知っているはどうしてなのか。それは、彼はいつ神に記憶されたのかを知っており、また忘れられること、記憶されることの意味を知っているからである。ダビデは多くの人とは違う。多くの方は、裕福な時、何事もうまくいっている時、人から名声を得ている時、何事もうまくいっている時に、神が自分のことを記憶していると考えます。そのため、彼らはいつ神に忘れられたのかを理解できない。彼らは記憶されていることの印を見逃し、忘れられ

ていることの印も見逃す。彼らが神から愛されていることの印を理解しないのならば、神から恵みがないことの印もわからないであろう。すなわち、神はとりわけ地上の幸せを得ている者のことを忘れ、一方で困難にある者を神は記憶する。つまり、私達が神に記憶されるには、善を行うこと、冷静であり、注意深いこと、徳を实践すること以外にはない。同じように、私達が神に忘れられるには、罪に生きること、貪欲、強欲に身を任せること以外にはない。そのため、親愛なるあなた達は、困難にある時、「神が私をお忘れになった」とは言うてはならない。そうではなく、罪に生きている時、何事もうまくいっている時にそう言うべきなのである。このことを理解したのなら、あなたはすぐに悪事から離れるべきである。

「いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか。(爾の面を我に隠すこと何の時に至るか)」これは、長い期間忘れていたということである。ダビデは神の怒り、罰を人間の行いによって表現している。神は、私達はその誠めを守らなかった時に、同様に私達から顔をそむける。聖書に次のように書いてあるのを思い出そう。「あなたがたが手を伸べるとき、わたしは目をおおって、あなたがたを見ない。」そして理由が次のように書いてある。「あなたがたの手は血まみれである。(イザヤ書 1:15)」しかし、人を捨て去ること、人から顔をそむけることは、神の大きな配慮の表れでもある。神は穏やかな方法で私達を引き付けようとして、このようなことをするのである。愛に酔った者は、自分をはねつける者を見て、追い払い、遠ざけるが、それは自分の心の中からも彼を追い出すのではない。彼はそうすることで、自分に注意を引き付け、また注意を釘づけにしようとするのである。

ダビデは顔を隠すことを述べた後、忘れることと、それがもたらす結果について述べている。実際のところ、それは何なのか。彼は次のように書いている。「いつまで、わたしは魂に痛みを負わなければならないのですか。(我が己の靈の中に謀ること何の時に至るか)」例えば、港を出た船乗りがあらゆる方向にさまよっているように、また光を奪われた人が物に突き当たるように、神から忘れられた者は、常に心配、不安、悲しみにとらわれる。一方で、心配すること、憔悴すること、悲しむこと、神があなたのもとから去ったことを考えることは、あなたが神を受け入れる大きな要因でもある。パウロも同じようにコリント人への手紙の中で、自分自身について書いている。「わたしが悲しませているその人以外に、だれがわたしを喜ばせてくれるのか。(コリント第二 2:2)」親愛なるあなた達よ、神が離れ去ったことを感じ、苦しみ、痛みを感じることは、決して小さな益ではない。このような経験をした後、私達はすぐに神を自分のもとに受け入れるだろう。

「いつまで敵はわたしの上にあがめられるのですか。わが神、主よ、みそなわして、わたしに答え、わたしの目を明らかにしてください。さもないと、わたしは死の眠りに陥り、・・・(我が敵の我に高ぶること何の時に至るか。主我が神よ、顧みて我に聴き給へ、我が目を明にして、我を死の蔭に蔭ねざらしめ給へ)」神が私達を守り、私達と共にいる時は、私達を害するものは全て取り除かれるが、神が私達から離れ、私達を忘れる時には、私達の心は引き裂かれ、心は悲しみ、私達を害する人々がやって来て、人生は険しいものとなる。しかし、これらのことは、私

達の益のために、許される。それらのことを通して、無関心な人々が落ちた状態から戻ろうと熱望するようになるためである。聖書には「あなたの悪事はあなたを懲らしめ、あなたの背信はあなたを責める。(エレミヤ 2:19)」と書いてある。そのため神から捨てられることも摂理の一つのあり方である。摂理し、配慮する神を私達が軽んじた時、神は私たちを無視し、捨てる。それは無関心さを取り除き、怠慢な人が熱心になるようにするためである。

ダビデが、私の上にあがめられている敵を見よ、と言っていることを考えよう。つまり、たとえ私の苦悩のためではなくても、敵の傲慢と愚かさのこのために、私のことを聴いてください、と言っている。あなたは何を願っているのか。敵に勝つことか。彼が願っているのはそういうことではなく、心の目が照らされ、魂を曇らせ、心の目を暗くする暗闇が散らされることである。私が願うのは以下のことである。つまり「わたしの目を明らかにしてください。」ということである。それは、私が罪の死に沈められるのを見て、『わたしの敵は「わたしは敵に勝った」』、つまり私の敵が私を倒し、願うところを成就した、と言わないようにするためである。「わたしは敵に勝った」とはどのような意味であるのか。彼は絶対的に強いわけではないとしても、私に対しては強いのである。私の打撃は彼に力を与え、強く、力ある者、勝つことのできない者とするのである。

私たちが罪を犯す時には、己を辱め、己を滅ぼし、死に陥るだけではなく、私たちが負かした敵が強く、力あるものであることを明らかにしている。そしてそればかりでなく、私たちは彼らを歓喜させている。いかに馬鹿げたことであるのか。自ら敵を助け、彼らが私たちにもたらす苦悩によって、彼らの魂を楽しませているとは。いかに馬鹿げているかを見なさい。私たちは敵に勝利すべきであるのに(「敵には武器こぶと悉くく盡き)、そして「悪者を滅ほろぼし、」(第9 聖詠))、負かされていることを。それだけではなく、彼らが力ある者、強い者であることを示していることを。さらに、私たちの無知、私たちの病はこれだけにとどまらず、私たちは彼らを喜ばせるものとなるのである。実際、罪は狂乱の極致であり、悪の極致である。「わたしのあだは、わたしの動かされることによって喜ぶでしょう。(我を攻むる者が我の撼うごく時に喜ばざらんたみ爲なり。)」預言者(ダビデ)は、主に自分のことを顧み、主の顔を自分に向け、願いを聴いて欲しいと願い、その根拠として三つの理由を挙げている。第一に敵の力と強さであり、第二に彼らの傲慢さ、第三に彼らの喜びである。彼はあたかも次のように言っているかのようである。主よ、私の願いに答えて、私の困難を顧みて、あなたの顔を私に向けてくれないのだとしたら、あなたが敵の誇っているのを顧みているのは、敵が自ら自分の強さを誇っているためという理由であり、敵が私の苦難に喜び、私の墮落をあざけり笑っているためという理由である、と。

「わたしに答え、わたしの目を明らかにしてください。(我にき聴き給へ、我が目をあきら明になし給へ)」罪にあることで陥る深い眠りを遠ざけなければならない。その眠りの中で私は次第に魂の死に陥る。つまり、私が少しでもあなた(神)の注意深い配慮から揺り動かされたなら、敵はそれを見て喜び、誇り、自らの力とするであろう。つまり彼らは傲慢になり、耐え難き者となるであろう。一方で、私が死んだとしたら、彼らは何を為し得たであろうか。預言者ダビデは、受けるべ

き罰にもまして、敵一般が喜ぶこと、強いと思われること、賞賛されるべきものと思われることがいかに大きな損失であると見なしていたか。もし彼がこれらの悪を大きなもの、耐え難いものと見なさなかったならば、神に懇願しその仁愛を受けるためにこの悪を露わにすることはなかったであろう。私たちもこのように行おう。敵が傲慢にならないように、強い者にならないように、敵に喜びを与えないように、考え、努力しよう。逆に反対のことは行おう。つまり、敵が卑しく、小さく、弱く、落胆、憂鬱になるようにさせよう。もし敵が罪人の悔い改めるのを見たならば、それらが実現するであろう。

「しかしわたしはあなたのいつくしみに信頼し(我爾の^{あわれみ}隣を^{たの}待み)」再び神があなたのことを顧み、自分の祈りを聴き、心の目を照らしてくれるよう祈願するために、あなたはどのような悔い改めをしたか。実際のところ、あなたの祈願にはいかなる根拠があるのか。ダビデは次のように言う。他の人が思うところがあるのであれば、言わせておくがよい。しかし私は、一つのことを知り、一つのことを言い、それに自分の全ての希望をおき、またそれを得ようと考えている。つまりそれは「あなたのいつくしみ(爾の^{あわれみ}隣)」であり、あなたの仁愛である。「しかしわたしはあなたのいつくしみに信頼する(我爾の^{あわれみ}隣を^{たの}待み)」あなたはダビデの謙遜さを見るか。この人の堅実な態度を見るか。たとえ彼は多くの徳を持ち、神に祈願することができる立場にあったとしても、彼はそれらのことを述べない。その代り、彼はただ神の憐れみに頼るだけである。彼が「もしわたしがこの事を行ったならば、・・・悪をもって報いたことがあるならば(若し我何事をか爲し、若し我報いしならば)(詩篇 7、7 聖詠)」と言う時、あるいはまた同様のことを言う時、それは必要に応じて言ってそのように言っているのは明らかである。もしそのような必要がなければ、彼は何も話さないだろう。むしろ、彼はあらゆる祈願の代わりに、神の憐れみと仁愛を得ようと考える。

自らの希望に欺かれることはないという確信から、ダビデは「わたしの心はあなたの救を喜びます。(我が心爾の^{すくい}救を喜ばん)」と付け加える。あなたは希望に満たされた魂を見るか。彼は願い、受け取る前に受け取ったかのように感謝し、神を賛美し、先取りされていたこと全てを成し遂げる。今や、彼の堅固な希望はどこから生じるのか。それは彼の並外れて堅実な態度からであり、熱心な願いからであり——というのも彼は、神は、このように願う人のことを聞いてくれることを知っているからである。——、大きな情熱と豊かな魂からである。ちょうど怠慢に願う者は、神から賜物を受け取ってもほとんど感謝することがないように、熱心に願う者は、その熱心で純粋な姿勢のため、賜物を受け取る前から、それを受け取ったかのように感じる。神の恵みが彼らを喜びで満たすかのようなものである。そのため、彼らは感謝し、自分を賜物を受けた立場に置くのである。

「わたしの心はあなたの救を喜びます。(我が心爾の^{すくい}救を喜ばん)」ダビデはあなたの救いを得ることは、私の心に喜びを与える、と言っている。またあなたが魂の救いであるので、私の心に喜びを与えると述べている。あなたは二種類の異なった喜びがあるのを知っているか。それは人の墮落したのを見て喜ぶ敵の喜び、そしてもう一つは自分自身の救いにおける魂の喜びである。

前者は悪い者による喜び、後者は救われた者による喜びである。前者は楽しんでいる者も、またその楽しむところのものをも、汚す。後者は楽しむ者にとって救いとなり、励みとなる。私たちは後者の楽しみにおいて喜びを見出し、前者の喜びは避け、遠ざける。

「主は豊かにわたしをあしらわれたゆえ、わたしは主にむかって歌います(我恩を施すの主を讃め頌ひ、至上なる主の名を崇め歌はん)」私はこの恵みを記憶するために、主に讃美を献げる。なぜなら、主は敵を挫き、敵を辱め、その弱さを示し、また私の祈りを聴き、私に顔を向け、それを中で私が死に向かっていた濃霧と暗闇を散らして、私に恵みを下さったからである。私に施して下さった仁愛のために、まるで消すことのできない記録のように、私は讃美の歌を献げ続けるだろう。今それを歌ってこれらの恵みについて考えるだけではなく、将来においても主の名を讃め歌い、その忘れ得ない大きな仁愛を自分の魂の中に保ち続けるだろう。そのため、そのような魂は悪に屈しても容易にそこから逃れるだけではなく、再び同じような苦難に陥らないように注意する。見よ、魂がこのような仁愛をいつも記憶しているため、魂は仁愛を受けることによってそこから逃れることができた、その困難をも明瞭に記憶しているのである。これらの悪を記憶することによって、魂は自分を悩ましていた悪の源について、また悪にとりつかれていた原因について注意深く考える。それからこのことを記憶することによって、同じような病の犠牲とならないように、あらゆる面において自分を防御する。このように、彼は自分の生活を建て直し、正しく導き、また自分を救ってくれた者に大いに感謝する。彼は贖罪者を知るのと同じように、未来における守護者を願う。

私たちもこのような魂に倣おう。たとえ罪に陥ったとしても、直ちに目を覚まし、より注意するきっかけとなし、二度と罪を犯さないという動機にしよう。しかし、どのようにしてできるか。あなたにはダビデという教師がいる。あなたは罪を犯しているか。そうであれば罪の中に眠るのではなく、目を覚ましなさい。神があなたから顔を背け、あなたを忘れたことを考えなさい。それから、泣き、悲しみ、毎夜寝床を涙で濡らし、悪を行う者と別れなさい。ダビデの教えとはこのようなものである。彼は一人で次のように言う。「主よ、いつまでなのですか。とこしえにわたしをお忘れになるのですか。いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか。(主よ、我を全く忘ること何の時に至るか、爾の面を我に隠すこと何の時に至るか)」この言葉を口で唱えるのではなく、それよりも先に心で唱えなさい。ダビデの他の祈願を唱えなさい。あなたが何を言う時でも、神の憐れみに望みを持ちなさい。望みを持ち、疑いを捨てなさい。聖書に次のように書いてあることを、思い起こしなさい。「疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は、二心の者であって、そのすべての行動に安定がない。(ヤコブ 1:6-8)」だから、神の憐れみに望みを持ち、疑いを捨てなさい。そうすればその願いをかなえることができるだろう。しかし一度かなえられたら、その仁慈に対して恩知らずとなるな。その仁慈を記録し、それを主に対する感謝の歌として献げなさい。

あなたは自分で感謝の歌を作る方法を知らないかもしれない。貧しい者を呼び集め、彼らの舌

を用いて、自分のために役立てなさい。神は貧者があなたのために歌う歌を、ダビデの歌と同じように喜んで聞いてくれることを確信しなさい。様々な調子で作られた歌が、一つの調子のものよりも甘いメロディーであるように、貧者が様々な仕方で作る歌は甘い響きを持ち、貧者の声に耳を傾ける神を引き付けるものとなる。それから自分自身のために、また神のためにこのような記念碑を建てなさい。神のためには、神の仁愛の記録としてである。また自分自身のためには、感謝の現れとして、また常に心に刻こむべき記憶の印としてである。それによって自らの生活を矯正しよう。さらに言うと、光栄と権能が世々に属す主イエス・キリストにあつて、来世の幸福をも相続し得るものとなるように、自らを矯正しよう。アーメン。

※聖金ロイオアン、木村英吉 訳『聖詠講話、上編』（正教会編輯局）を St. John Chrysostom , *Commentary on the Psalms*, trans. Robert Charles Hill (Holly Cross Orthodox Press)を参照して現代語訳しました。(神戸ハリストス正教会 司祭 エフレム後藤悠太)